

## モンゴル・カラコルム金貨について

安木 新一郎\*

## A Gold Coin Minted in Karakorum, Mongolia

Shinichiro Yasuki\*

## キーワード

モンゴル カラコルム ディナール金貨 ウイグル文字 アラビア文字

2012年8月にモンゴルのハルホリン Хархоринにあるカラコルム博物館を訪問し、展示物の中にモンゴル帝国時代のイスラーム様式の金貨があることに気づいた。この金貨に関する情報はモンゴル国立博物館の発行したパンフレット“Chinggis Khaan :an Exhibition”に掲載されている<sup>1</sup>。

本稿では、この金貨に極印された文字情報にもとづき、カラコルム建都の時期について検討したい。

図 カラコルム博物館展示ディナール金貨



(表)

(裏)

図は直径24.1mm、重さ4.43gのディナール金貨で<sup>2</sup>、2012年8月時点ではカラコルム博物館に展示されていた。上記パンフレットによれば、この金貨はニャマー氏<sup>3</sup>の個人所有物である<sup>4</sup>。

この金貨の裏側にはアラビア文字アラビア語で、カリマ、すなわち「アッラーのほかには神はなく、ムハンマドはアッラーの使者である」<sup>5</sup>という聖句と、バグダッド(アッバース朝)

\*やすき しんいちろう：大阪国際大学国際コミュニケーション学部准教授 (2014.11.15受理)

のカリフ・ナーシルの名前が書かれている。

表側は判読不能な箇所が多いが、図のもっとも下部にウイグル文字モンゴル語で Khormホルムとあり、この金貨がカラコルムで鍛造されたことがわかる。つまり、このディナール金貨にはアラビア文字とウイグル文字という2種の文字が使用されているのである<sup>6</sup>。ちなみに漢文でもカラコルムは和林と略される。

また表側にはアラビア文字で fi shuhur sana thalatin (三十年の数か月に) と書いてあることから、この金貨が鍛造されたのはヒジュラ暦630年、すなわち西暦1232～33年であると考えられる<sup>7</sup>。

まとめると、図のディナール金貨はヒジュラ暦630年にカラコルムで鍛造されたものと推定できるのである。

貨幣に名前が刻まれることは、フトゥバ(公式説教)においてその土地の支配者が明言されることと同じである<sup>8</sup>。イブン・ジュバイルによるとナーシルは有能で尊敬されたカリフであるが<sup>9</sup>、ナーシルのカリフ在位は1180～1225年であり1232～33年には死没している。モンゴルのカアンではなくカリフの名を刻み、しかもすでに亡くなっているカリフに言及している点は興味深い。

チンギス・カン(1219年)から1225年まで、中央アジアのイスラーム教国であるホラズム・シャー朝への遠征をおこなったが、この遠征中にモンゴル征服地でのイスラーム様式の貨幣鍛造がはじまっている。

こうしたモンゴル帝国初期のイスラーム貨幣の中には、一つの貨幣の表側にチンギス・カン、裏側にはカリフ・ナーシルの名が入っているものがあり、鍛造地がガズナ(アフガニスタン)やバフシ(タジキスタン)と明記されているディナール金貨、また鍛造地のわからないデイルハム銀貨も見つかっている<sup>10</sup>。

本稿で考察しているディナール金貨と同じくカラコルムで鍛造されたデイルハム銀貨が、2000年からおこなわれたモンゴル科学アカデミーと独ボン大学の共同調査で発掘されている。この銀貨には表側にアラビア文字で「アッラー」、ウイグル文字で「ホルム」、およびオゴデイの三つ又のタムガがあり、裏側にアラビア文字でQRH QRM(カラコルム)および外縁部にヒジュラ暦635年(1237～38年)とある<sup>11</sup>。カラコルムの金貨の表側にもオゴデイのタムガあるいは名そのものが書き込まれている可能性があるが、現時点では判読不能である。

さて、通説ではオゴデイ・カアン(1229～1261年)の時代の1235年にモンゴルははじめて固定した首都をカラコルムに定め、漢風の宮殿である万安宮を建造したとされる<sup>12</sup>。

しかしながら、『至正集』巻45、其勞馬著「勅賜興元閣碑」によると、

太祖聖武皇帝之十五年歲庚辰、定都和林。

とあり、1221年にチンギス・カンがカラコルムを都としたとの記事がある。現在のモンゴル政府も1221年にカラコルムは首都として建設されたとしている。

松田孝一氏の研究によると、ホラズム・シャー朝遠征中の1221年にモンゴル高原の中央

部にカラコルムという都市を建設した。また、チンギス・カンがホラズム・シャー朝遠征で捕虜とした技術者をモンゴル高原や北中国に送り生産基地を作らせたことが知られている<sup>13</sup>。カラコルム付近はチンギス・カンの末子トルイの領地とされ、トルイはホラズム・シャー朝遠征から帰還した1224年にはカラコルム近辺に滞在し、トルイの領民が多数居住していた<sup>14</sup>。

本稿で取り上げた金貨の文字情報から、オゴデイ・カアンが首都とする前にはすでにカラコルムは金貨が発行されるほど多数のムスリムが居住する都市に成長していたことがわかるのである。

おそらくオゴデイ即位以前からカラコルムに居住していたムスリムはトルイの領民であったと思われる。

## 付記

本稿執筆にあたり、松田孝一・大阪国際大学名誉教授より懇切丁寧なコメントをいただいた。また、本稿は2013年6月9日の貨幣史研究会第44回例会（於、甲南大学）での報告の一部に加筆修正したものである。言うまでもなく、本稿におけるありうべき誤謬はすべて筆者にきせられるものである。

## 注

- 1 The National Museum of Mongolia (2011), “*Chinggis Khaan :an Exhibition*,” Ulaanbaatar, Mongolia. (in English and Mongolian).
- 2 Id. at p.34.
- 3 ニャマー（Нямаа）博士にはモンゴル帝国の貨幣に関する多数の著作がある。例えば、Nyamaa, Badarch (2005), *The coins of Mongol Empire and clan tamagha of Khans (XIII-XIV)*, Ulaanbaatar, Mongolia, およびNyamaa, Badarch (2011), *The coins of Mongol Empire (XIII-XIV)*, Ulaanbaatar, Mongoliaを参照。
- 4 The National Museum of Mongolia, *op cit.*, p.34.
- 5 カリマの邦訳はイスラミックセンタージャパンのホームページ掲載のイスラーム解説文にある訳によった (<http://islamcenter.or.jp/about-islam/>) (最終閲覧日：2014年7月31日)。
- 6 現時点でモンゴル帝国の貨幣に二言語で2種以上の文字が使用されるもっとも早い事例の一つが本稿で紹介するカラコルムで鍛造されたディナール金貨であり、ボン大学とモンゴル科学アカデミーによる2000年～2001年のカラコルム調査で発見されたディルハム銀貨にもアラビア文字とウイグル文字が使用されている (Nyamaa (2011), p.16)。つまり1232年ごろにモンゴル高原で鍛造されるようになった貨幣が参照されてモンゴル帝国西半各地で貨幣へのウイグル文字使用が広まったと思われる。なお、中村雅之 (2005) 「ジャニ・ベグ (キプチャク汗国) の貨幣二種」『KOTONOHA』(古代文字資料館)、第36号、2005年11月、(<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf/nakamura36.pdf>) (最終閲覧日：2014年7月31日)) では、キプチャク汗国 (金帳、またはジョチ・ウルス) の貨幣において二言語が同時使用されるものは非常に珍しいとされる。一方、Nyamaa (2005) では多数のジョチ・ウルス発行二言語貨幣が紹介されている。二言語貨幣が珍品であるから特筆されるべきものとしてNyamaa (2005) で取り上げられているのか、それとも二言語貨幣は一般的に見られる形式であるのかについては、今後の研究課題としたい。
- 7 The National Museum of Mongolia (2011) ではヒジュラ暦630年を西暦1230年としているが、正確には1232～33年である。
- 8 イブン・バットゥータ (イブン・ジュザイイ (編集)、家島彦一 (訳)) (1996) 『大旅行記4』、

東洋文庫。

- 9 イブン・ジュバイル（藤本勝次・池田修訳）（2009）『イブン・ジュバイルの旅行記』、講談社学術文庫。
- 10 Nyamaa（2011）, pp.17-25.
- 11 Id. at pp.38-39. Heidemann, Stefan（2002）, Coin pendant from Central Asia, Roth, Helmut R. and Ulambajar Erdenedat（ed.）（2002）, *Qara Qorum-City (Mongolia) I, Preliminary report of the excavations 2000-2001*, Bonn Contributions to Asian Archaeology, Vol.1, 2002, pp.79-80（Institute of Pre- and Early Historical Archaeology, Bonn University）.
- 12 例えば、杉山正明（1996）『モンゴル帝国の興亡』、上、講談社現代新書、pp.66-68。
- 13 松田孝一（2002）「モンゴル帝国における工匠の確保と管理の諸相」、松田編（2002）『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』、pp.171-199。
- 14 松田孝一（1994）「トゥルイ家のハンガイの遊牧地」『立命館文學』、(537)、p.1007-1026。